

家庭科教育における「見方・考え方」に関する一考察

佐 藤 ゆかり*

(令和2年8月31日受付；令和3年1月8日受理)

要 旨

教科の固有性から目標を捉える視座及びその教科のあり方を貫く原理から目標を捉える視座によりつつ、学習指導要領及び学習指導要領解説に示された教科の目標及び教科の見方・考え方を家庭科の固有性を規定する学問とされる家政学の目的及び方法に着目し整理を行なった。さらに、学習指導要領に見方・考え方が示された背景には何があったのかについて資料の整理を試みた。それを踏まえ、今後の家庭科の授業実践における見方・考え方をどのように捉えるかを考察した。結果、家庭教育の背景学問である家政学は、対象を全体的な視点で統合する総合科学である点に特色があることから、全体的な、総合的な、統合的な視点こそ、家政学にとって欠かせないものであることが示された。したがって、学習指導要領等に示されている「生活の営みに係る見方・考え方」は家庭科教育における見方・考え方として十分なものとはいえないのではないかと考えられた。

KEY WORDS

Home economics education 家庭科, Home economics 家政学, perspective パースペクティブ

1 はじめに

小学校での実施を皮切りに、新学習指導要領^(注1)に基づく学習が今年度から順次始まった。周知の通り、「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」の4点がこの学習指導要領の特徴として示されている⁽¹⁾。

「育成を目指す資質・能力」を明確化して、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間力」の3つの柱に整理し、すべての教科等における目標及び内容をこれらの柱に基づき整理したことは、学校教育における各教科等の意義及び役割を示す意味において重要と考えられている⁽²⁾。加えて、目標には「深い学び」の鍵となる各教科等の特質に応じた見方・考え方が示されることになった。

これによって、小学校の家庭科^(注2)の目標は「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次の通り育成することを目指す。(1) 家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。(2) 日常生活のなかから問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。(3) 家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。」⁽³⁾となった。この目標には、家庭科の特質に応じた見方・考え方を働かせ、活動を通して、資質・能力を育成することが示されていることになる。前述のように教科の特質に応じた見方・考え方は「深い学び」の鍵となることが指摘されていることから、家庭科の授業を構想し、実践する際には「生活の営みに係る見方・考え方」をどのように捉えていくかが極めて重要になると考えられる。

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説によると「生活の営みに係る見方・考え方」は「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」⁽⁴⁾と示されている。また、「家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて(報告)」の資料に示された図を用いて説明されることもある。図では、「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」に係る各生活事象を「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の視点で捉える際の考え方が示されている⁽⁵⁾。主として捉える視点は大きな丸印で示されること、そして、取り上げる内容や題材により、どの視点を重視するのかが異なってくるこ

*自然・生活教育学系

が説明されている。たとえば、「協力・協働」という視点は、「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」のいずれの生活事象にも関わるが、主として「家族・家庭生活」を捉える視点であるとのことである。また、この「生活の営みに係る見方・考え方」は小中高の全段階における家庭科に共通に示されたものであることから、小学校段階のみならず、中学校及び高校での家庭科の授業を行なう際に「生活の営みに係る見方・考え方」をどのように理解するかも重要になる。

各教科の見方・考え方は、どのような視点で物事を捉え、そのような考え方で思考していくのかというその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方であり、各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものである⁽⁶⁾と示される。このことを踏まえた新学習指導要領に沿った学習はまさに始まったばかりであるが、「生活の営みに関する見方・考え方」を踏まえた家庭科授業実践の検討・報告はいくつかみられる⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾。そのいずれもが学習指導要領に示された「生活の営みに係る見方・考え方」である「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」のいずれかの視点によるものである。今後、「生活の営みに係る見方・考え方」を踏まえた授業実践はさらに増えていくことが予想されることから、家庭科の本質を踏まえた見方・考え方について、今一度確認する必要があると考える。

家庭科を学ぶ本質的な意義は家庭科教育学の成立の条件、家庭科固有の教授学的な諸視点に示されることがある⁽¹⁰⁾。それによると、教科理論は教科科学と専門科学から導かれるものであるという。つまり、人間の教育が生きるためのものであり、家庭科の教科理論が専門科学としての「家政学」から導かれるとすれば、家庭科の教科理論は、結論的に「環境制御理論」である⁽¹¹⁾という。ここで提起された「家政学」から導かれた「環境制御理論」を、各教科を学ぶ本質につながるものとした場合に、それは、学習指導要領等の「生活の営みに係る見方・考え方」に示された各視点と重なるものなのだろうか。各生活事象を「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の視点で捉えるという見方・考え方は、「環境制御理論」を学ぶことを家庭科の本質的な意義と考えた場合に、十分な役割を果たすものなのだろうか。

学習指導要領において重要な事項とされている見方・考え方とはどのような背景により、記述されたのだろうか。また、家庭科と他の教科の相違はどこにあるのだろうか。先に述べたように、新学習指導要領に基づく家庭科の授業実践、すなわち、「生活の営みに係る見方・考え方」を踏まえた授業実践は今年度から本格化していく。そこで、本稿では、家庭科の授業実践において求められる「生活の営みに係る見方・考え方」を考察することを目的として、教科の見方・考え方に関係する資料等を検討し、家庭科教育における見方・考え方に関する問題提起を行ないたい。

2 研究の方法

本研究では教科教育の目標研究及び歴史研究の方法⁽¹¹⁾により行なった。教科の目標の研究は、次の3つの視座により行なわれることが多い。第一は教科の固有性から目標を捉える視座であり、第二は教科の目標に加え、内容や方法をも含み、その教科のあり方を貫く原理から目標を捉える視座である。第三は、教科教育の実践を担う教師の選択や判断から教科の目標を捉える視座である。

「ある教科の固有性は、他の並列する教科からその教科を区別するものであり、それは教科の目標に現れる。」⁽¹²⁾とされることから、ここでは、教科の固有性から目標を捉える視座及びその教科のあり方を貫く原理から目標を捉える視座によりつつ、(1)学習指導要領及び学習指導要領解説に示された教科の目標及び教科の見方・考え方及び(2)家庭科の固有性を規定する学問である家政学の目的及び方法に着目し整理を行なった。さらに、(3)学習指導要領に見方・考え方が示された背景には何があったのかについて資料の整理を試みた。

これら3点の整理ののちに、今後の家庭科の授業実践における見方・考え方をどのように捉えるかを考察していく。なお、(1)は、小学校を対象として、小学校学習指導要領(平成29年告示)、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説をもとに整理を行なった。(2)は「家政学全体に関する基本的・根本的原理を考究して、家政学の本質を明らかにし、家政学の独自性と科学的位置を解明する研究分野」⁽¹³⁾であるという家政学原論の位置づけにより⁽¹⁴⁾、(一社)日本家政学会家政学原論部会『やさしい家政学原論』(建帛社)をもとに整理を行なった。(3)は「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標内容と評価の在り方に関する検討会」論点整理(H26.3.31 H26.6.3修正)及び第1回(H24.12.13)～第13回(H26.3.17)部会資料⁽¹⁵⁾をもとに検討を行なった。

表1 小学校学習指導要領（平成29年告示）の目標及び学習指導要領解説に示された各教科の「見方・考え方」^{(16) (17)}

教科	学習指導要領に示された目標（一部抜粋）	学習指導要領解説に示された各教科等の「見方・考え方」とは
国語	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	言葉への自覚を高めること
社会	社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。	社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したり解決したりする際の「視点や方法（考え方）」
算数	数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	算数の学習において、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考をしていくのかという、物事の特徴や本質を捉える視点や思考の進め方や方向性を意味する
理科	自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行なうことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	問題解決の活動によって児童が身に付ける方法や手続きと、その方法や手続きによって得られた結果及び概念を包含する（従来）資質・能力を育成する過程で児童が働かせる「物事を捉える視点や考え方」 「考え方」については、問題解決の能力を基に整理
生活	具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	どのような視点で、物事を捉え、どのような考え方で考えていくのか 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする
音楽	表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	音楽に関する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や、文化などと関連付けること
図画工作	表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと
家庭	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること
体育	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること
外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行なう目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること
総合的な学習の時間	探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行なうことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	探究のプロセスを支えるのが探究的な見方・考え方である 探究的な見方・考え方には、二つの要素が含まれる。一つは、各教科における見方・考え方を総合的に働かせるということである。二つは、総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせることである。それは、特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えることであり、また課題の探究を通して自己の生き方を問い続けるという、総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方である

3 小学校学習指導要領（平成29年告示）に示された教科等の見方・考え方と家庭科

前ページの表1は小学校学習指導要領に示された各教科等の目標及び小学校学習指導要領解説に示されたその教科の見方・考え方に関する記述である。11教科中5教科は教科の名称を含む形で、「見方・考え方」が示されている。具体的には、社会、算数、理科、音楽、体育がそれにあたる。しかし、家庭科は「家庭科的な見方・考え方」や「家庭科の見方・考え方」ではなく「生活の営みに係る見方・考え方」として示されている。このことから、家庭科では、家政学において生活の営みをどのような見方・考え方で捉えているのかをまずは踏まえる必要があると思われる。「生活科」にも「生活に関わる見方・考え方」という記述がみられることから、「生活科」と「家庭科」の生活の見方・考え方の違いはどこにあるのか、そのことを家庭科の背景学問である家政学から導きだすことが重要と考える。

4 家政学の見方・考え方

日本家政学会家政学原論部会編『やさしい家政学』をもとに、家政学の見方・考え方を整理した。それは前述の通り、家政学原論が「家政学全体に関する基本的・根本的原理を考究して、家政学の本質を明らかにし、家政学の独自性と科学的位置を解明する研究分野」⁽¹⁸⁾であるという位置づけによる。また、教科等の見方・考え方が、その教科の本質に裏付けられるものであり、視点と考え方をも含むことから、ここでは、家政学の本質を定義から、その見方・考え方を研究対象及び方法に関する記述からみていく。

表2は日本国内で示された家政学の定義である。日本家政学会が公式見解としてまとめた最初の家政学の定義は1970年のものであった。そこでは、「家政学は、家庭生活を中心として、これと緊密な関係にある社会事象に延長し、さらにこれらと環境との相互作用について、人的・物質的の両面から研究して、家庭生活の向上とともに人間開発をはかり、人類の幸福増進に貢献する実証的・実践的科学である」⁽¹⁹⁾と示されていた。1980年代には、『家政学将来構想1984』に「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」⁽²⁰⁾という定義が示された。2013年には家政学原論部会行動計画2009-2018の「行動計画第1グループ」によって「家政学とは、個人・家族・コミュニティが自ら生活課題を予防・解決し、生活の質を向上させる能力の開発を支援するために、家庭を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について研究する実践科学であり、総合科学である。家政学は生活の福祉の視点から、持続可能な社会における質の高い生活を具現化するライフスタイルと生活環境のありようを提案する。」⁽²¹⁾という定義が示された。これらいずれにおいても、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境の相互作用、そして、実践、総合という語句を確認できる。

次に家政学の研究対象をみていく。『家政学将来構想1984』に示された家政学の定義では研究対象を「家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について」⁽²²⁾としている。この部分は「研究対象の範囲を家庭生活を中心におきながらも人間生活全般に拡張し、そこにおける人と環境との相互作用という動的でエコロジカルな対象認識が採用されている」⁽²³⁾と説明される。ここでのエコロジカルとは、家庭そのものが人間が創り出した「人工（為）環境」の一つであり、日々の生活そのものが環境との相互作用によって成り立っていること、さらに、家政学としての研究や教育を行なうためには、その環境全体を見渡すことが必要不可欠であり、その全体的視野、そして生態学的調和の視点こそが、家政学の独自性である⁽²⁴⁾と説明されている。

最後に、家政学の研究方法をみていく。家政学の研究方法は、人的・動的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究することであり、人に関する研究分野と物に関する研究分野を持ち合わせ、それらを総合化して「最適な（家庭）生活のあり方」「よりよい（家庭）生活のあり方」を考えようとするところに、総合科学としての家政学の独自性がある⁽²⁵⁾と説明されている。

以上のことから、家政学の定義及び研究対象、研究方法からは、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用を全体的に総合的に捉えることが家政学の見方・考え方には欠かせないことが示唆される。

他方、IFHE^{注3)}の査読委員会による家政学研究的視点は興味深い。それによると、家政学的研究には、①統合性、②具体性、③実践性、④現代性、⑤予防性という5つの視点が求められるという。①統合性とは生活の視点を総合的にみる視点、②具体性とは実生活の営みに関する課題意識、③実践性とは現実の生活を強化・向上させること、④現代性とは現在、現実に営まれている生活に関する問題意識、予防性とは将来の予測を踏まえること⁽²⁶⁾であると示されている。

教科の見方・考え方が、その教科の本質によるものであることから、家庭科の見方・考え方を導く際には、家政学が何を目的とするものであるのか、そして、その目的を達成するために、何を対象とし、どのような方法により、検討していくのかということが重要である。

家政学はその定義及び方法において、実践科学であり、対象を全体的な視点で統合する総合科学である点に特色があると示されており、全体的な、総合的な、統合的な視点は家政学にとって欠かせないものと考えられるが、生活とは、具体的、実践的、個別的であること、現在及び将来におけるよりよい生活を営む視点も重要であることから、予防的視点の検討も求められよう。

表2 家政学の定義

年	定義
1970	家政学は、家庭生活を中心として、これと緊密な関係にある社会事象に延長し、さらにこれらと環境との相互作用について、人的・物質的の両面から研究して、家庭生活の向上とともに人間開発をはかり、人類の幸福増進に貢献する実証的・実践的科学である。(日本家政学会初の公式見解)
1984	家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。(日本家政学会編『家政学将来構想1984』)
2013	家政学とは、個人・家族・コミュニティが自ら生活課題を予防・解決し、生活の質を向上させる能力の開発を支援するために、家庭を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について研究する実践科学であり、総合科学である。家政学は生活の福祉の視点から、持続可能な社会における質の高い生活を具現化するライフスタイルと生活環境のありようを提案する。('行動計画第1グループ')

5 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」

では、どのような経緯を経て、各教科等における見方・考え方が示されるに至ったのであろうか。

このことは「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会^{注4)}」において議論されたという。検討会は平成24年12月13日の第1回を始めとして、平成26年3月17日までの間に計13回実施された^{注5)}。表3は各回の議題である。

全13回の議事録において見方・考え方の語句が示されているのは第9回と第11回議事録であった。第9回議事録には「『その教科ならではのものの見方・考え方、処理や表現の方法等』と、『重大な観念』が対応関係にある。『重大な観念』には、『重要な概念』だけでなく、重要なスキルやプロセスも含まれている点に留意されたい。『スキル』というと個別的なものと受け止められがちであるが、複雑な思考・判断・表現をする上では、複数のスキルを組み合わせさせて複雑なものを処理するストラテジーやプロセスが重要。このような概念やプロセスを総合し、本人が体系付けるために、『本質的な問い』が求められるという、構造的な整理が必要。(一部抜粋)」と示されている。このことから、「見方・考え方」が視点にとどまらず、考えるためのプロセスをも含み議論されていることが確認される。さらに、第1回議事録にも考えるプロセスをも含む見方・考え方には、「構造的」であること、「本質的」であることが必要と示されている。第11回議事録には、その教科ならではのものの見方、考え方は、その教科が対象としているもの以外にも有用性・汎用性があり、教科横断的という発想の中で、既存の教科の可能性を外に広げ、教科の存立の意義を広めることにもつながるのではないかということが示されている。このことは、その教科に特徴づけられるものの見方・考え方は、その教科以外の対象事象においても転移するものであり、そのことが、教科の存在意義を確認することにもつながると予測されていることとうかがえる。つまり、各回の議論は、学校教育における各教科等を教科の本質を踏まえること、各教科間の位置づけを構造化すること、さらに、各教科の内容を構造化する方針で進められていたと確認できる。

そこで、見方・考え方が示されるに至った議論をみていきたい。

表3に示したように「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の構造について」の議論を皮切りに、この検討会の議論は始まった。そこでは、必要な事項をより構造化していく必要があること、幼児教育から大学・大学院教育、そして、社会人としての資質・能力を含めて、教育課程のレベルでそれらをどのようにつないでいくかが課題であることなどが示された。その流れにおいて、第5回議事録には、パースペクティブのある人間を育てることの重要性についての議論が示されている。有識者から「コンピュータは学んだことから何が重要なのかというパースペクティブを得ることが極めて難しいため、コンピュータにはできない能力としてパースペクティブのある人間を育てる

ことこそが重要。その意味では、機械と競争できる分野は極めて広く、機械に代替できる範囲は限定されると考えている。ただ、パースペクティブの欠ける子どもたちも少なくないので、この点が初等中等教育で非常に重要になる。」⁽²⁷⁾という発言がなされた。そして、それを受けて委員の一人が「予測困難な状況の下で自分で判断することの必要性も、有識者の御説明にあったパースペクティブの育成という課題とつながってくるように思われる。」⁽²⁸⁾と発言している。

パースペクティブとは、「生徒が物事を異なる視点から見て、事例の別の側面を明確に表現し、全体像を捉え、規定にある想定を認識し、批判的な立場を取ることができる場合に示されるものである」⁽²⁹⁾とされている。G.ウィギンズとJ.マクタイは理解をもたらすカリキュラム設計に必要なものの一つにパースペクティブがあることを示し、パースペクティブを持つということは、批判的思考により、各観点を捉えつつ、全体像を見ること⁽³⁰⁾と説明している^{注6)}。

これらから、この第5回を起点として、「見方・考え方」に関する議論が進んでいったと予想される。また、見方・考え方はパースペクティブという考え方に概念に裏打ちされるものと考えられる。

表3 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」各回の内容

1	1.座長の選任等について 2.育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の構造について 3.その他
2	1.「〈新しい能力〉と学習評価の枠組み」(松下佳代委員より発表) 2.教育目標、指導内容、学習評価を一体的に捉えた教育課程のあり方について 3.その他
3	1.国立高専が育成する資質・能力と到達目標について(市坪誠・独立行政法人国立高等専門学校機構教授より発表) 2.モデル・コア・カリキュラムとそれに準拠した共用試験について(福田康一郎・社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構副理事長より発表) 3.その他
4	1.社会的レリバンスの高い教育課程設計と評価の在り方について(本田由紀・東京大学大学院教育学研究科教授より発表) 2.これからの社会で求められる人材、能力とその力の測定について(新井健一ベネッセ教育研究開発センター長より発表) 3.その他
5	1.変革的な「形成的」評価の提案-個人個人の学習過程を評価して、次の授業展開につなげる評価はいかにして可能か(三宅なほみ・東京大学大学院教育学研究科教授より発表) 2.比類なき技術革新時代の中で問われる学校教育の役割(新井紀子・国立情報学研究所社会共有知研究センター長より発表) 3.上田薫・元都留文科大学学長からのヒアリングについて 4.その他
6	1.教育課程の編成に関する基礎的研究(国立教育政策研究所より発表) 2.その他
7	1.真の〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造(新潟県上越市立大手町小学校より発表) 2.国際バカロレアMYPにおける教育目標・内容と評価(東京学芸大学附属国際中等教育学校より発表) 3.課題探究型学習でつきたい力・ついた力(京都市立堀川高等学校より発表) 4.その他
8	1.育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方について 2.その他
9	1.育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の構造について 2.その他
10	1.教育目標、指導内容、学習評価を一体的に捉えた教育課程の在り方について 2.教育課程の基準における資質・能力の示し方について(国立教育政策研究所より発表)
11	1.これまでの議論を踏まえた論点整理(素案)について 2.その他
12	1.これまでの議論を踏まえた論点整理(案)について 2.その他
13	1.これまでの議論を踏まえた論点整理(案)について 2.その他

6 おわりに

学習指導要領等に示されている「生活の営みに係る見方・考え方」は家庭科教育における見方・考え方として十分なものののだろうか。現在示されている「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」という4つの視点は生活の営みをみる視点として必要なものではあるが、十分なものではないのではないだろうか。

家庭科教育における見方・考え方が教科の本質によるものであり、また、家庭教育の本質及び独自性が家政学を背景とするものであるならば、対象を全体的な視点で統合する総合科学である点に特色があると示されており、全体的な、総合的な、統合的な視点こそ、家政学にとって欠かせないものと考えられる。また、生活とは、具体的、実践的、個別的であること、現在及び将来におけるよりよい生活を営む視点も重要であることから、予防的視点の検討も求められよう。つまり、家庭教育における見方・考え方とはその教科におけるパースペクティブ、つまり、生活の営みに係るパースペクティブと考えられる。

『家政学未来への挑戦全米スコッツデイル会議におけるホーム・エコノミストの選択』では「人間生態学とホーム・エコノミクス」という視点から、元来個人を取り巻く人的、物的、自然的、文化的、その他あらゆる環境の個々のあるいは、個と全体との相互作用に焦点をおくパースペクティブは対象の包括性ゆえに包括的な知識を必要とする」と示され、繰り返し、パースペクティブという語句が示されている。そこで示されているものは何なのか。そのことと、学習指導要領に示されたものはどの部分で重なり、どの部分が異なるのか、何なのかを引き続き検討したい。

注釈

- 1) ここでの新学習指導要領とは、小学校学習指導要領（平成29年告示）、中学校学習指導要領（平成29年告示）、高等学校学習指導要領（平成30年告示）のことである。
- 2) 学習指導要領に示された教科名は家庭であるが、ここでは家庭科と記す。
- 3) 国際家政学会のこと
- 4) 委員会委員は平成24年12月～、平成25年6月～ともに、座長安彦忠彦（神奈川大学特別招聘教授）、天笠茂（千葉大学教育学部教授）、市川伸一（東京大学大学院教育学研究科教授研究科長）、奈須正裕（上智大学総合人間科学部教授）、西岡加名恵（京都大学大学院教育学研究科准教授）、松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）、副座長無藤隆（白梅学園大学子ども学部教授兼子ども学研究科長）、村川雅弘（鳴門教育大学院学校教育研究科教授兼基礎・臨床系教育部長）、吉富芳正（明星大学教育学部教授）の9名であった。
- 5) 委員会は、第1回平成24年12月13日、第2回平成25年1月21日、第3回平成25年2月12日、第4回平成25年3月12日、第5回平成25年5月20日、第6回平成25年6月27日、第7回平成25年7月31日、第8回平成25年8月30日、第9回平成25年10月7日、第10回平成25年11月22日、第11回平成26年1月27日、第12回平成26年2月25日、第13回平成26年3月17日に行なわれ、各回、2時間程度の会議であった。
- 6) パースペクティブ（perspective）は理解の6側面の一つ。他の最もらしい視点を捉える能力。これにはまた、理解すれば知っていることから距離をとったり、その瞬間の見解と感情にとらわれないようにしたりすることが可能になると含意されている。また、「パースペクティブを持つてみる」ことは、aある立場を批評し、正当化する。つまり、それを1つの見解として見る。訓練された会議主義と理論の点検を具体化するようなスキルと態度を活用する。b事実と理論を文脈位置付ける。その知識や理論が答えや解決策であるような問いや問題を知っている。cある観念や理論に基づいている想定を推論する。dある観念の有効性だけでなく限界を知っている。e偏っていたり、党派的だったり、イデオロギー的だったりする主張や言葉を見抜く。fある観念の重要性や価値をわかって、説明する。g批判的な立場を取る。批判と信念の両方を懸命に用いる。（方法論的に「他の人が疑う時に信じ、他の人が信じる時に疑う」と私たちはよりよく理解できる可能性が高い、というペーター・エルボーの格言によって要約されている能力である。

引用・参考文献

- (1) https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2017/09/28/1396716_1.pdf（2020.8.16取得）
- (2) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm（2020.8.16取得）
- (3) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）、p.136
- (4) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編、pp.7-8
- (5) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/065/sonota/_icsFiles/afiedfile/2016/09/12/1377053_01.pdf（2020.8.16取得）
- (6) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編、p.4
- (7) 日浦美智代、一ノ瀬孝恵、円並地利恵外9名（2017）家庭科の資質・能力育成のための小・中・高等学校連携カリキュラムの構想－共通コンセプトの検討と学習内容の体系化－、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、第45号、pp.65-75
- (8) 上間江利子、田原美和、土屋善和（2019）《技術・家庭科（家庭分野）》学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成（3年次）：生活の営みに係る見方・考え方を働かせる協働学習の工夫を通して、琉球大学附属中学校研究紀要、第31号、pp.91-98
- (9) 花輪由樹（2020）小学校家庭科の住まいにおける音の学習に関する研究－「生活の営みに係る見方・考え方」からの検討－、兵庫教育大学研究紀要、第56巻、pp.51-58
- (10) 藤枝恵子、「教科教育学」の成立条件を探る－家庭科教育学の立場から－（1990）東洋・蛸谷米司・佐島群巳『教科教育学の成立条件－人間形成に果たす教科の役割－』東洋館出版社、p.46
- (11) 前掲10）、pp.46-60
- (12) 日本教科教育学会（2017）『教科教育研究ハンドブック－今日から役立つ研究手引き－』教育出版、pp.108-113
- (13) 亀高京子、仙波千代（1981）『家政学原論』光生館、p.2
- (14) 日本家政学会家政学原論部会（2018）『やさしい家政学原論』建帛社、p.1

- (15) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/index.htm (2020.8.16取得)
- (16) 前掲(3)
- (17) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編, p.12
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編, p.10
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 算数編, pp.22-23
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編, p.13
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編, pp.10-11
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編, pp.10-11
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編, pp.10-11
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編, pp.12-13
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編, pp.18-19
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編, pp.15-16
小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編, pp.17-19
- (18) 前掲(14), p.1
- (19) 前掲(14), p.11
- (20) 日本家政学会編(1984)『家政学将来構想1984』光生館, p.32
- (21) 日本家政学会家政学原論部会(2013)「行動計画2009-2018」第1グループ「家政学的研究ガイドライン[第1次案]」, p.3
- (22) 前掲(20)
- (23) 前掲(20)
- (24) 前掲(20)
- (25) 前掲(14), p.13
- (26) 前掲(21), pp.6-7
- (27) 前掲(5)
- (28) 前掲(5)
- (29) G.ウィギンズ・J.マクタイ著, 西岡加名恵訳(2018)『理解をもたらすカリキュラム設計-「逆向き設計」の理論と方法』, 日本標準, pp.196-198
- (30) 前掲(29), pp.114-117

A Study of Home Economics Education and Perspective

Yukari SATO*

ABSTRACT

In order to understand the objectives from the originality of the subject home economics and the principles penetrate through the subject, we have investigated through the curriculum objectives, the perspectives, and viewpoints indicated in the curriculum guidelines and its detailed explanations, the objectives and methodology of home economics, which is the investigation and arrangement of the disciplines regulating the originality of the subject, along with the background of the “interpretation and thinking” regarding the curriculum. Based on these investigations, we have also touched on and discussed optimal activities for home economics. We have found that home economics provides background knowledge for home education featured with the integration of perspectives of learners. From such an entire, integrated, and general viewpoint, we have come to know the essential elements of the subject. Hence, we are convinced that the “interpretation and thinking about daily life activities” in the curriculum guidelines are insufficient for the education of home economics indeed.

* School Education